# 中級日本語学習者の「話す」活動における ビデオブログ(vlog)の学習効果および課題

## The Learning Effects and Problems of Vlogging Tasks as Speaking Activities for Intermediate Japanese Language Learners

ツォイ　エカテリーナ

### 要旨

本稿は、中級日本語学習者の「話す」活動におけるビデオブログの効果および課題についての報告である。学習者が授業課題の一環として継続的に作成したビデオブログのデータを用い、文法的誤用および語彙的誤用、発話の修復、沈黙、1 文の長さを判定・測定し、分析項目間の相関を検討した。その結果、ビデオブログによる学習者自身の言語運用に対する意識化という効果が示された。また、一部のデータにおいては、ビデオブログの回数と文法的誤用、1 文の長さとの間に正の相関が認められ、発話の長文化および文法的誤用の減少というプラス効果が示唆された。一方、語彙的誤用が増加するケースも見られ、沈黙との相関から、語彙選択の困難さが示された。これにより、「話す」活動におけるビデオブログの課題として、学習者が伝えたい内容を適切な言葉で表現できる語彙力の育成の必要性が確認された。

**キーワード**:「話す」活動　vlog　中級日本語学習者　誤用

## 0　はじめに

近年、現代社会の急速な情報通信技術（ICT）の発展に伴い、コミュニケーション手段が多様化し、私達は動画を通じて多くの人とやり取りができるようになった。第二言語教育も時代とともに変化し続け、インターネットを利用した e ラーニング教材が開発されてきた。こうした中、SNS や動画配信サイトで学習目的のポッドキャストやビデオブログが登場し、急速に発展する ICT 技術に支えられた学習形態として広がりを見せている。

ビデオブログ（以降 vlog と記す)とは、個人が短い映像で自身の日常、趣味、考え等を記録した日記のことである。第二言語教育では、以前からも「読む」・「書く」能力を育成するための学習活動としてブログ(blog)、つまりインターネット上で公開される日記が用いられているが、音声付き動画の利用によりブログの活用を「聞く」・「話す」にまで広げることが可能となった。こうして vlog は、学習活動の多様化に寄与するとともに、対面に限らないやり取りを日常的に経験する「デジタルネイティブ」である Z 世代の学習者にとっては、日常生活に馴染んだ学習形態ともなっている。

本調査では、実際に産出された発話データの分析を通じて、vlog の学習効果および中級日本語学習者が「話す」にあたって直面する課題の可視化を目指す。

## 1　「話す」活動における vlog の活用

先行研究では、学習活動としてのブログは、構文の複雑さおよび文法の正確さ、流暢性を高めることに効果的であるという指摘がなされている(Hewett 2000; Pellettieri 2000; Ho 2003)。また、学習者の活動範囲を教室外に広げ、多様な学習活動の充実に繋がるという評価も見られる(Williams and Jacobs 2004; Richardson 2006)。しかし、これまでの報告の多くがアンケート調査に基づいており、学習者の vlog データを用いた研究蓄積が十分とは言えない。

Sun(2009)は、中国語を母語とする英語学習者を対象に、話す能力およびプレゼンテーションスキルを伸ばす授業で音声によるブログ(voice blogging)を実施し、ブログにおける学習過程を表 1 に示した 5 つの段階に分けている。

表 1. ブログにおける段階およびストラテジー(Sun 2009, p.94; 訳は筆者による)

| 段階 | ストラテジー |
|---|---|
| 構想(Conceptualizing) | 1. 何をどのように話すかについて考える。 |
| | 2. 適切なトピックに絞る。 |
| | 3. アイディアを得るために、他者の音声ブログを聴く。 |
| | 4. 辞書、またはインターネットを検索する。 |
| | 5. ノートを取る。 |
| 整理(Brainstorming) | 1. アウトラインを作成する。 |
| | 2. 中国語を英語に翻訳する。 |
| | 3. 録音の前にスクリプトを作成する。 |
| 発声(Articulation) | 1. 録音の前に予行演習を行う。 |
| | 2. 音声ブログを録音し、アップロードする。 |
| 確認(Monitoring) | 1. アップロードの前に録音したファイルを聴く。 |
| | 2. ブログの内容、構成、言語使用をチェックする。 |
| 評価(Evaluating) | 1. ブログの内容、構成、言語使用を評価する。 |
| | 2. ブログを再作成する。 |

Sun(2009)の報告から分かるように、ブログは「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」の言語能力の 4 技能を総合的に扱う学習活動であり、自律学習の促進に効果的である。

筆者は上記の先行研究における言及を踏まえ、以下の 5 点を目的に学習活動として vlog を中級日本語の授業に導入した。

①　学習者が特定の話題で一定量の発話ができる機会の確保

クラス規模によっては学習者全員に一定量の発話をする機会を与えるのは困難なことがあるため、vlog の課題を導入することにより、学習者が教室外でも口頭練習ができるようにする。

②　新出語および文法項目の応用練習

授業で学んだ語彙や文法項目を、学習者の関心のあるトピックへの応用に繋げる。

③　学習者の誤用に対する個別指導

教師は vlog へのコメントにより、それぞれの学習者の発話を文章で提示し、誤用等について個別に詳細なフィードバックができるようにする。

④　vlog の視聴による学習者同士の相互的学習の促進

提出された課題は、教師側のみならず、受講者同士でも閲覧可能なため、互いの vlog の視聴、コメントにより、相互的学習を促す。

⑤　話すことへの心理的なバリアの解消

vlog の視聴者、つまりコミュニケーション相手を意識した言語活動の要素を保ちつつ、学習者各自のペースで練習に必要な時間および環境を与えることにより、話す際の緊張感および心理的な負担を軽減する。

## 2　分析データ

本調査で用いた vlog のデータは、2019 年度の秋冬学期に一橋大学で中級日本語の授業を受講した留学生[1]8 名(男女各 4 名)によって作成されたものである。データを作成した全員が過去の語学学習において授業課題としての vlog を経験しておらず、初めて学習目的で vlog に取り組むことになった。

vlog を取り入れた科目は「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」の 4 技能を総合的に育成する教科書型授業であり、指定テキストとして『できる日本語中級本冊』(アルク)を使用した。vlog のトピックは該当課のテーマに沿って設定し、課ごとに宿題として課した(表 2)。vlog の作成方法については、該当課で学習した語彙や表現を指定したが、発話の自発性を保つために、スクリプト作成およびスクリプトの読み上げはしないように指示した。

**表 2. vlog のトピック**

| 課のテーマ | vlog の課題内容 |
|---|---|
| 第 1 課「新たな出会い」 | 初めて会う人に自分のことを覚えてもらえるような自己紹介する。 |
| 第 2 課「楽しい食事・上手な買い物」 | 日本、または自国でおすすめの店を紹介する。 |
| 第 3 課「時間を生かす」 | 将来したいことや、そのために現在取り組んでいることについて話す。 |
| 第 4 課「地域を知って生活する」 | 日本での生活で経験したトラブルおよびその解決方法について話す。 |
| 第 5 課「緊急事態！」 | 寮の緊急時のルールを説明する。 |
| 第 6 課「地図を広げる」 | 出身地の特徴や歴史について話す。 |
| 第 7 課「世代を超えた交流」 | 参加したことがある、または参加してみたいボランティア活動やサークル活動について話す。 |
| 第 9 課「言葉を楽しむ」 | 日本語の好きな言葉について話す。 |
| 第 10 課「日本を旅する」 | 印象に残っている旅行について話す。 |
| 第 11 課「ライフスタイル」 | 日本と自国のライフスタイルの違いについて話す。 |
| 第 13 課「トレンドに乗ってつながる」 | 自国の若者で流行していることについて話す。 |

[1] うち交換留学生は 7 名、大学院正規生は 1 名である。

受講者は、カメラに向かって指定されたトピックで約 2 分間話し、動画を大学の授業支援システムにアップロードした。提出された vlog は、受講者全員に閲覧・コメント可能な設定になっており、誤用等についてのフィードバックは担当教員からのコメント書き込みにより個別に行われた。

本分析で用いたデータは、受講者が継続的に提出した第 1 課～第 7 課[2]および第 9 課[3]の 8 回分の vlog、計 64 件のデータである。

## 3　分析方法

分析方法としては、vlog の動画データを文字化し、発話率[4]、1 文の長さ[5]、沈黙時間[6]を測定し、文法的誤用および語彙的誤用、発話の修復箇所をコーディングした。

以下 3.2~3.3 節では、分析の中心となる「文法的誤用」、「語彙的誤用」、「発話の修復」の具体例を挙げ、判定基準について説明する。

### 3.1 文法的誤用

本項目では、文法指導において広く用いられている Makino and Tsutsui(1989)、庵・高梨・中西・山田(2000, 2001)、グループ・ジャマシイ(2015)の説明に基づき、談話の文脈および論理展開を考慮しつつ、動詞や形容詞の活用、語と語の接続、助詞の選択並びに文内の要素の対応関係における誤りを「文法的誤用」とした。

筆者が行ったコーディングの信頼性を検討するために、日本語母語話者 2 名に 2 次チェックをしてもらい、$AC_1$ 統計量(Gwet's first-order agreement coefficient)を求めた。その結果、$AC_1$=.86 という高い一致率が確認された。2 次チェックの判定が一致しなかった箇所は、誤用と断定できないため、分析データから除外した。

以下に、誤用と判定された箇所を下線で示し、判定基準を説明する[7]。

(1) 学習者 5、第 5 課「緊急事態！」

ガラス::は..危な..ったら:: <1.73> ん..、え、近くの窓に::..、えー <1.24> えー <1.98> い::/..いけ/..行けません。

例(1)は、下線部分の「危な..ったら::」が形容詞の「危ない」における過去形の誤りであるため、「文法的誤用」とした。

(2) 学習者 3、第 5 課「緊急事態！」

数週..前に::..、er::、消防..訓練が::..あった::が::..、えっとー、何も..、er::、習な {かった}。

例(2)は、下線部分の「習なかった」が動詞「習う」における否定形の誤りであるため、「文

---

[2] 第 8 課および第 12 課は、授業で学習しなかったため、vlog の課題を設けなかった。
[3] 第 10 課以降は未提出のものがあったため、分析データから除外した。
[4] 発話時間 10 秒当たりの仮名文字数を示す。
[5] 1 文当たりの仮名文字数を示す。
[6] vlog の 1 件当たりの沈黙秒数を示す
[7] 文字化記号の凡例は稿末の資料 1. 「文字化記号一覧」を参照。

法的誤用」とした。

(3) 学習者 4、第 4 課「地域を知って生活する」

日本人と..友達になる..のは..えっとー < 0.74> はちょっと難しいだ..と思います。

例(3)は、意見を述べる文型「～と思う」におけるコピュラ「だ」の付加が形容詞の接続の誤りであるため、「文法的誤用」とした。

(4) 学習者 8、第 4 課「地域を知って生活する」

警察::が、he::m..、探して::くれま/..くれましたけど::..、er、この自転車、er::..、まま見つけないです。

例(4)では、語順の誤りおよび動詞の自他選択の誤りにより文が首尾一貫しないため、下線部分の箇所を「文法的誤用」と判定した。

(5) 学習者 1、第 3 課「時間を生かす」

仕事は何でもいいと思います <5.62>。ストレスが少なくて給料は..足りれば::..満足します。結婚相手もいれば <1.89> よかったです。だから今..よく勉強 <1.0> するつもりです。

例(5)では、将来への展望について語るという話題内容および、下線部分を含む文の前後における時制からは、「よかった」の形式が談話の文脈に沿っていないと考えられる。よって、「よかった」の箇所は「文法的誤用」とした。

(6) 学習者 7、第 7 課「世代を超えた交流」

そして、あの <1.59> 私のふるさとには..よくワインが..生産されています..ね。

例(6)は、下線部分の助詞「に」の使用が不適切であるため、「文法的誤用」とした。

### 3.2 語彙的誤用

本項目では、カタカナ語および漢字語における読みの誤り、コロケーションや慣用句における語彙・表現選択の誤り、話者の意図と異なる意味に解釈される語彙や表現の使用を「語彙的誤用」として扱った。

データの信頼性を検討するために、文法的誤用の分析と同様の手続きで日本語母語話者 2 名に筆者のコーディングを 2 次チェックしてもらった。$AC_1$ 統計量を算出した結果、$AC_1$=.93 となり、語彙的誤用においても高い一致率が確認できた。2 次チェックの判定が一致しなかった箇所は分析データから除外した。

(7) 学習者 8、第 4 課「地域を知って生活する」

三番目、er、は::..、えーと、hem..、用事しに::..、えー、行っ..ていた時に::..、えっと、er::..、この自転車の::..パンチ..も::..、er::..、えーっと、タイヤも、er、パンチしました。

(8) 学習者 1 、第 3 課「時間を生かす」

いつも辛い‘からい’経験‘けいげん’<1.66> が多いですから..今安定な暮らしだけほしいです。

例(7)の「パンチ」は、カタカナ語の「パンク」の誤りであり、例(8)の「からい」および

「けいげん」は漢字語の「辛い(つらい)」および「経験(けいけん)」の読みの誤りと考えられるので、「語彙的誤用」と判定した。

(9) 学習者 7、第 4 課「地域を知って生活する」

それで..日本に::着いた時に:: <0.78> あのー..私は::..全部の::..電器が..使えませんでした <1.38>。あの、最初::には..、あの、スマホをチャージ..できるため::..この::..100 円..のプラグを買いました <0.99>。そして..もうすぐ::..ビックカマラ‘カメラ’に..行って::..この::..アダプターを買いました。

例(9)の下線部分の前後の発話からすると、「最初には」は順序を表す「最初に」、「もうすぐ」は「すぐ(に)」の語彙選択の誤りであり、いずれも「語彙的誤用」とした。

(10) 学習者 3、第 1 課「新たな出会い」

私はちょっと::、er、しん..神経::質な..、er、人です::から::..、er、友達と::..議論が::..ほしくないから..、んー、いつも“あっ、大丈夫です、大丈夫です”.. er、全部は大丈夫です。

例(10)の「議論」は行為を表す名詞であるため、「議論したくない」のように「する動詞」としての使用が適切であり、下線部分の「議論がほしくない」は表現選択の誤りによる「語彙的誤用」とした。

### 3.3 発話の修復

「修復(repair)」とは、会話分析で扱われる概念であり、発話の産出・聞き取り・理解の際に生じた問題への対処法(言葉の置き換えや言い直し等)を指している(Schegloff, Jefferson and Sacks 1977)。それに近いものとして、第二言語教育の研究では、学習者が自身の発話における誤りを訂正する、という「自己訂正」の概念が用いられており、「削除(omission)」、「追加(addition)」、「置き換え(substitution)」、「並び替え(re-ordering)」の 4 つに分類されている(Fathman 1980)。これらの訂正による発話の言い直しは言い淀みを伴うことが多く、「自己訂正」を非流暢性の要因の一つとして捉える研究も見られる(Biber, Johansson, Leech, Conrad and Finegan 1999; 神澤・田中・井上 2019)。

本稿では、誤りが訂正された発話のみならず、話す内容に具体性を持たせたり、より複雑な構文を作り上げることを意図して、途中で展開変更した発話も分析対象とする。そのため、誤用の有無に関わらず、文法・語彙の訂正、発話の展開変更を「修復」として扱う。以下に、発話におけるトラブル源の箇所は一重線、学習者による修復箇所は二重線で示す。

(11) 学習者 7、第 6 課「地図を広げる」

そして <0.89> あの、大きな::町に:: <0.78> でっ/ 大きな町でできない..こともありますね。

例(11)は文法的な誤りの修復の例である。学習者は、「大きな::町に:: <0.78> でっ/」と言いかけるが、助詞「に」の誤用に気がづく。そして、「でっ/(きる)」で発話を中断し、「大き

な町でできない」と助詞の誤りを訂正することにより発話を修復する。この例では、発話産出のトラブル源と考えられる助詞「に」の直後に生じた 0.78 秒の沈黙は、学習者が発話中に行う内省を反映しており、学習者自身の言語運用への意識を明確に示している。

(12) 学習者 4、第 3 課「時間を生かす」

でも、もちろん..お金::は大事なことですから::..、えっとー、その場合では..、えっと..、インターンシップから..給料..をもらうのは..す::ごく..必要なことです..すごく大事なことです。

例(12)では、学習者は「す::ごく..必要なことです」と一旦発話を終了するが、語彙選択を見直し、「すごく大事なことです」と語彙を置き換えることにより終了部分の修復を行う。

(13) 学習者 3、第 5 課「緊急事態！」

僕の::、er::..、ジャーナリズムの先生::..が::..、えっとー..、er::..、机の下は..危ない..と言って::.. ①と言った::。〔中略〕実際に..、er::..、台っふ/、 er::、②最近、er::、台風が::あった::。

例(13)には、発話展開の変更による修復が 2 箇所見られる。①の部分では、「と言って::」の後に文が続くことが予想されるが、学習者は動詞「言う」の活用形変更により言い切りの形で文を終了し、発話の展開を修復する。②の部分では、学習者は発話を「台っふ/」で一旦中断するが、「最近」の挿入によって発話を拡張し、より複雑な文を作り上げる。

## 4 「話す」活動における vlog の学習効果および課題

本節では、文法的誤用および語彙的誤用、発話の修復に焦点を当て、分析項目間の相関を検討し、その相関から見えてくる学習効果および課題について考察する。表 3 は、全項目の集計結果を示したものである。

**表 3. 分析項目の集計結果**

| 課 | 文法的誤用 | | 語彙的誤用 | | 発話の修復 | | 発話率 | | 1 文の長さ | | 沈黙 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 件数 | 平均値 | 件数 | 平均値 | 件数 | 平均値 | 文字/秒 | 平均 | 文字数 | 平均値 | 秒数 | 平均値 |
| 第 1 課 | 65 | 8.1 | 39 | 4.9 | 21 | 2.6 | 330.5 | 41.3 | 247.6 | 30.9 | 110.9 | 13.9 |
| 第 2 課 | 59 | 7.4 | 60 | 7.5 | 19 | 2.4 | 302.4 | 37.8 | 246.5 | 30.8 | 135.2 | 16.9 |
| 第 3 課 | 64 | 8.0 | 49 | 6.1 | 21 | 2.6 | 299.4 | 37.4 | 265.4 | 33.2 | 114.5 | 14.3 |
| 第 4 課 | 77 | 9.6 | 50 | 6.3 | 24 | 3.0 | 277.2 | 34.7 | 247.3 | 30.9 | 168.0 | 21.0 |
| 第 5 課 | 59 | 7.4 | 55 | 6.9 | 26 | 3.3 | 282.5 | 35.3 | 247.4 | 30.9 | 163.0 | 20.4 |
| 第 6 課 | 63 | 7.9 | 64 | 8.0 | 32 | 4.0 | 307.3 | 38.4 | 255.3 | 31.9 | 121.8 | 15.2 |
| 第 7 課 | 79 | 9.9 | 55 | 6.9 | 32 | 4.0 | 305.3 | 38.2 | 259.1 | 32.4 | 134.2 | 16.8 |
| 第 9 課 | 90 | 11.3 | 65 | 8.1 | 33 | 4.1 | 297.8 | 37.2 | 256.7 | 32.1 | 125.3 | 15.7 |

まず、全分析項目の集計結果を検定したところ、vlog 回数と発話の修復との間には高い正の相関が認められた（$r = .952$, $p < .001$）[8]。vlog 練習の回数とともに発話の修復が多くなるという結果からは、継続的な vlog 練習による学習者自身の言語運用への意識化が窺える。また、発話率と沈黙とで負の相関が認められ($r = -.738$, $p < .05$)、発話率が上がるほど沈黙が減るという流暢性を示す指標の関連性が確認された。

全体の結果では文法的誤用および語彙的誤用に関する相関が見られなかったため、以下に調査対象者別の検討を行う[9]。

調査対象者 8 名のうち 3 名、学習者 1、学習者 2、学習者 5 のデータにおいては、1 文の長さおよび文法的誤用、発話の修復に継続的な vlog 練習によるプラス効果が見られた。学習者 1 のデータでは、vlog 回数と 1 文の長さとの間に正の相関が認められ($r = .762$, $p < .05$)、vlog 練習を重ねるほど発話される 1 文当たりの仮名文字数が増えるということが明らかとなった。学習者 2 のデータでは、vlog 回数と文法的誤用とで高い負の相関が示され($r = -.892$, $p < .01$)、vlog の練習を重ねるとともに文法的誤用が減るということが分かった。学習者 5 に関しては、全体の結果と同様に、発話の修復との相関が確認され($r = .710$, $p < .05$)、学習者 5 は vlog 練習を行う中で、自身の発話を意識し、頻繁に訂正を入れるようになったと示唆される。

一方、2 名の調査対象者、学習者 7 および学習者 8 のデータには、vlog の練習を重ねるほど誤用が増えるというマイナス効果が見られた。学習者 7 は、語彙的誤用との相関($r = .747$, $p < .05$)、学習者 8 は、語彙的誤用($r = .732$ $p < .05$)並びに文法的誤用との相関($r = .755$ $p < .05$)が認められた。さらに、学習者 5 および学習者 6 のデータでは、語彙的誤用と沈黙との間に正の相関が認められ(学習者 5: $r = .916$ $p < .001$; 学習者 6: $r = .762$ $p < .05$)、記憶操作に時間を要する語彙選択の困難さが示された。

以上をまとめると、本調査では vlog の回数と発話の修復の出現件数との相関から継続的な vlog 練習による学習者自身の言語運用への意識化が示された。また、一部の学習者のデータのみではあるが、長文化および文法的誤用の減少に関しても、継続的な vlog 練習によるプラス効果が窺えた。一方、語彙的誤用の減少は見られず、文法、語彙ともに誤用が増えるケースがあり、本稿で取り上げた vlog 活動においては学習者が伝えたい内容を適切な言葉で表現できる語彙力の育成が大きな課題となる。

## 5　終わりに

本稿では、中級日本語学習者の文法的誤用および語彙的誤用、また発話の修復を分析し、継続的な vlog 練習の学習効果および課題について述べた。本調査では、学習者が実際に産出した発話のデータを用い、誤用、発話の修復、文の長さ、沈黙、発話率の相関を見ること

[8] 項目間の相関の検討には Spearman 相関係数の検定を用いた。
[9] 調査対象者別の集計結果については稿末の資料 2 表 a～h を参照。

により「中級の壁を乗り越える」ための課題が可視化された。ただし、データのサンプル数が少なく、それぞれの学生が練習にかける労力が異なっており、対象者別の分析では共通の傾向が見られなかった。これらの課題を踏まえ、今後の展望としては、対象者を増やし、より詳細な検討を行っていきたい。

## 参考文献

Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S. and Finegan, E. 1999. *Grammar of Spoken and Written English*. Longman.

できる日本語教材開発プロジェクト(著)、嶋田和子(監修). 2013.『できる日本語中級本冊』アルク.

Fathman, A.K. 1980. Repetition and correction as an indication of speech planning and execution processes among second language learners. In Dechert, H. W. and Raupach, M. (eds.), *Towards a cross linguistic assessment of speech production*. Peter D. Lang. 77-85.

グループ・ジャマシイ(編著). 2015. 『日本語文型辞典』くろしお出版.

Hewett, B. 2000. Characteristics of interactive oral and computer-mediated peer group talk and its influence on revision. *Computers and Composition*, 17(3), 265-288.

Ho, Y. 2003. Audiotaped Dialogue Journals: An Alternative Form of Speaking Practice. *ELT Journal*, 57(3), 269-277.

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(著)、松岡弘(監修). 2000.『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(著)、白川博之(監修). 2001.『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

神澤克徳・田中悠介・井上優大. 2019.「第二言語の発話における自己訂正と学習者の習熟度の関連性」『言語処理学会 第 25 回年次大会 発表論文集』、982-985.

Makino, S. and Tsutsui, M. 1989. *A dictionary of Basic Japanese Grammar*. The Japan Times.

Pellettieri, J. 2000. Negotiation in cyberspace: The role of chatting in the development of grammatical competence. In Warschauer, M. and Kern, R. (eds.), *Network-based language teaching: Concepts and practice*. Cambridge University Press. 59-86.

Richardson, W. 2006. *Blogs, wikis, podcasts, and other powerful Web tools for classrooms.* Corwin Press.

Schegloff, E. A., Jefferson, G. and Sacks, H. 1977. The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation. *Language*, 52(2), 361-382.

Sun, Y. 2009. Voice Blog: An Exploratory Study of Language Learning. *Language Learning & Technology*, 13(2), 88-103.

Williams, J.B. and Jacobs, J. 2004. Exploring the Use of Blogs as Learning Spaces in the Higher Education Sector. *Australasian Journal of Educational Technology*, 20(2), 232-

247.

（ツォイ　エカテリーナ　国際教育交流センター　特任講師）

**【付録】**

資料 1.　文字化記号一覧

| | |
|---|---|
| 。 | 文の終了を示す。 |
| 、 | トランスクリプトの見やすさのために、読点として慣例通りに付ける。 |
| .. | つっかえにおいて生じる 0.5 秒以下の短い間を示す。 |
| / | 発話の中断を示す。 |
| “文字” | 話者および話者以外の者の発話、思考、判断、知覚等の内容が引用された部分を示す。 |
| ‘文字’ | 漢字表記の読み方が複数ある場合や、実際に発話された内容が漢字表記と異なる場合の補足情報を示す。 |
| <数字> | 沈黙の秒数を示す。 |
| :: | 直前の音が引き延ばされていることを示す。カタカナ語における長音は慣例通りに「ー」で示すが、通常でない引き延ばしは「::」で示す。 |
| ｛文字｝ | 笑いながら発話された部分を示す。 |

資料 2.

表 a. 学習者 1：分析項目の集計結果

| 課 | 文法的誤用(件) | 語彙的誤用(件) | 発話の修復(件) | 発話率(文字/秒) | 1 文の長さ(文字) | 沈黙(秒) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 10 | 6 | 7 | 44.9 | 22.8 | 8.95 |
| 2 | 6 | 7 | 4 | 43.6 | 31.0 | 4.64 |
| 3 | 7 | 10 | 4 | 35.5 | 29.0 | 7.31 |
| 4 | 13 | 11 | 7 | 33.6 | 31.5 | 15.05 |
| 5 | 8 | 6 | 9 | 35.8 | 31.1 | 17.91 |
| 6 | 9 | 15 | 14 | 38.4 | 30.8 | 10.65 |
| 7 | 18 | 8 | 10 | 38.6 | 36.0 | 12.81 |
| 9 | 13 | 8 | 6 | 22.8 | 32.3 | 3.34 |

表 b. 学習者 2：分析項目の集計結果

| 課 | 文法的誤用(件) | 語彙的誤用(件) | 発話の修復(件) | 発話率(文字/秒) | 1 文の長さ(文字) | 沈黙(秒) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 11 | 5 | 1 | 46.6 | 26.8 | 17.66 |
| 2 | 10 | 7 | 2 | 37.0 | 23.0 | 11.96 |
| 3 | 10 | 12 | 2 | 32.3 | 33.3 | 13.73 |
| 4 | 8 | 3 | 3 | 34.3 | 32.0 | 22.04 |
| 5 | 6 | 5 | 4 | 34.3 | 30.9 | 15.81 |
| 6 | 4 | 7 | 4 | 34.3 | 33.8 | 8.49 |
| 7 | 1 | 4 | 2 | 32.2 | 33.3 | 6.59 |
| 9 | 6 | 3 | 3 | 38.9 | 32.2 | 26.17 |

表 c. 学習者 3：分析項目の集計結果

| 課 | 文法的誤用(件) | 語彙的誤用(件) | 発話の修復(件) | 発話率(文字/秒) | 1 文の長さ(文字) | 沈黙(秒) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 6 | 2 | 1 | 29.2 | 30.1 | 7.71 |
| 2 | 5 | 10 | 2 | 26.4 | 28.0 | 8.9 |
| 3 | 8 | 7 | 1 | 24.2 | 30.5 | 8.38 |
| 4 | 5 | 7 | 6 | 31.1 | 27.1 | 11.15 |
| 5 | 7 | 3 | 3 | 24.1 | 27.1 | 11.91 |
| 6 | 7 | 9 | 1 | 36.8 | 35.2 | 6.2 |
| 7 | 12 | 2 | 2 | 33.4 | 31.6 | 9.74 |
| 9 | 5 | 3 | 3 | 25.8 | 33.4 | 7.71 |

表 d. 学習者 4：分析項目の集計結果

| 課 | 文法的誤用(件) | 語彙的誤用(件) | 発話の修復(件) | 発話率(文字/秒) | 1 文の長さ(文字) | 沈黙(秒) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 11 | 10 | 1 | 43.3 | 30.8 | 7.17 |
| 2 | 12 | 10 | 0 | 46.5 | 33.5 | 13.74 |
| 3 | 12 | 9 | 4 | 42.8 | 29.8 | 15.85 |
| 4 | 15 | 1 | 1 | 28.5 | 32.7 | 6.66 |
| 5 | 10 | 12 | 3 | 40.1 | 29.5 | 6.32 |
| 6 | 10 | 8 | 1 | 38.3 | 29.1 | 11.46 |
| 7 | 9 | 9 | 1 | 44.5 | 28.9 | 9.98 |
| 9 | 13 | 4 | 1 | 41.3 | 30.8 | 5.91 |

表 e. 学習者 5：分析項目の集計結果

| 課 | 文法的誤用(件) | 語彙的誤用(件) | 発話の修復(件) | 発話率(文字/秒) | 1 文の長さ(文字) | 沈黙(秒) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 9 | 4 | 1 | 35.6 | 20.4 | 26.14 |
| 2 | 12 | 12 | 1 | 31.1 | 20.3 | 51.6 |
| 3 | 12 | 6 | 4 | 35.7 | 21.8 | 24.38 |
| 4 | 13 | 11 | 1 | 30.3 | 20.2 | 46.34 |
| 5 | 10 | 10 | 1 | 30.3 | 24.6 | 40.44 |
| 6 | 6 | 9 | 2 | 33.8 | 21.9 | 35.62 |
| 7 | 9 | 4 | 10 | 34.5 | 29.3 | 24.34 |
| 9 | 12 | 9 | 8 | 39.0 | 20.9 | 40.98 |

表 f. 学習者 6：分析項目の集計結果

| 課 | 文法的誤用(件) | 語彙的誤用(件) | 発話の修復(件) | 発話率(文字/秒) | 1 文の長さ(文字) | 沈黙(秒) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 3 | 1 | 4 | 44.4 | 38.4 | 19.6 |
| 2 | 6 | 8 | 4 | 45.1 | 29.8 | 28.18 |
| 3 | 9 | 2 | 4 | 44.9 | 36.0 | 21.68 |
| 4 | 9 | 5 | 2 | 42.8 | 37.1 | 32.75 |
| 5 | 4 | 9 | 5 | 39.6 | 35.6 | 38.06 |
| 6 | 6 | 4 | 3 | 44.8 | 40.4 | 19.89 |
| 7 | 8 | 6 | 4 | 47.2 | 32.9 | 42.36 |
| 9 | 9 | 3 | 1 | 47.9 | 38.6 | 19.32 |

表 g. 学習者 7：分析項目の集計結果

| 課 | 文法的誤用(件) | 語彙的誤用(件) | 発話の修復(件) | 発話率(文字/秒) | 1 文の長さ(文字) | 沈黙(秒) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 3 | 4 | 1 | 46.6 | 33.3 | 14.75 |
| 2 | 4 | 1 | 1 | 43.3 | 43.9 | 11.52 |
| 3 | 0 | 1 | 1 | 44.5 | 51.3 | 15.9 |
| 4 | 3 | 6 | 1 | 43.6 | 39.7 | 18.92 |
| 5 | 3 | 3 | 0 | 41.8 | 42.5 | 14.6 |
| 6 | 5 | 5 | 3 | 47.6 | 38.6 | 18.83 |
| 7 | 5 | 10 | 1 | 45.7 | 34.9 | 15.58 |
| 9 | 5 | 10 | 2 | 44.5 | 36.5 | 18.55 |

表 h. 学習者 8：分析項目の集計結果

| 課 | 文法的誤用(件) | 語彙的誤用(件) | 発話の修復(件) | 発話率(文字/秒) | 1 文の長さ(文字) | 沈黙(秒) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 12 | 7 | 5 | 39.8 | 45.0 | 8.95 |
| 2 | 4 | 5 | 5 | 29.5 | 37.1 | 4.64 |
| 3 | 6 | 2 | 1 | 39.4 | 33.8 | 7.31 |
| 4 | 11 | 6 | 3 | 33.0 | 27.1 | 15.05 |
| 5 | 11 | 7 | 1 | 36.6 | 26.1 | 17.91 |
| 6 | 16 | 7 | 4 | 33.3 | 25.5 | 10.65 |
| 7 | 17 | 12 | 2 | 29.2 | 32.1 | 12.81 |
| 9 | 27 | 25 | 9 | 37.5 | 32.1 | 3.34 |